

出会のワゴン (後期)

食欲の秋、運動の秋、芸術の秋、そしてなんとなく読書も読書の秋！ 皆さん、日々の朝読活動は潤っていますか。実はもう同じ本を何周もしている、そんな人にこそ参考にしたい出会のワゴン。今月は『一日で読める本』というテーマの下、複数の感想「」を添えてお送りします。

『うつくしい日々』 蟻川実花

父が亡くなるまでの一年半のあいだ、映画監督でもある娘が撮りつづけた写真集。

『日常の刹那刹那の美しさが閉じ込められた写真集』『作中どの写真にも映っていないはずの「父」の存在感を強く感じた』

『木を植えた男』 シャン・シオン 英訳付き絵本版

たった一人で不毛の土地を緑豊かな土地に変えた老農夫の物語。

『ページの左右に英文と日本語訳が書かれていて英語が苦手でも英文に親しみやすい』『勇気をもらえる』『続けることの難しさを感じた』

『とりかへばや物語』 作者不詳 田辺聖子訳ほか

男児は「姫君」として、女児は「若君」として育てられることとなった平安後期の物語。

『現代に通ずる考え方が中世にも存在していることを知り、驚いた』『様々な生き方があると思ったし、認め合うことが大切とも感じた』

今回はいろいろな視点から本を紹介しようというところで、それぞれの選んだ本を、六年生数人で回し読みました。数人分の感想の込められたポストは、いつも以上に見応えがあるハズ！ 同じ本でも読者の数だけ読み方がある……。ぜひとも次の本選びの参考にしてください！ (六年)

岩波少年文庫と海外文学のすすめ

今回は、海外文学、特に岩波少年文庫について紹介します。

海外文学というと取っ付きにくい印象があるかもしれませんが。しかし、そうはいえども、世界に不朽の名作といわれる小説は多くあり、岩波少年文庫に収録されているものもあります。

例えば、『ナルニア国物語』や、『ゲド戦記』、『果てしない冒険』、『王への手紙』などです。これら以外にも数々の名作があります。

さて、岩波少年文庫は終戦から5年後の1950年、新たな時代を生きる子どもたちのために、石井桃子訳の海外文学を中心に発刊されました。1961年から1973年までの休止期間を挟み、今年で70周年を迎えました。この間に収録された作品数はなんと460を超えます。

その中でも、義務教育課程の子どもたちに向けた文学は多く、前期生に大変おすすめです。本校図書館で海外文学は、ドストエフスキーとかヘミングウェイ、フォークナーなどや難しい内容が多く、貸し出しはもとより手にする人も多いとは言えません。そうなる、せつかくの蔵書を生かされています。

このような海外文学に手を伸ばすための一助として、まずは岩波少年文庫の海外文学作品を手にとることをお勧めしたいのです。どの本を手にとっても必ずや面白かったとかまた読みたいという気持ちにさせるものばかりです。

前期生は今のうち、後期生は今からでもぜひ一度読んでみてください。絶対に感動すると思います！ (四年)

新刊紹介 (新書)

『世界経済図説』

宮崎 勇

『陸海の交錯―明朝の興亡』

檀上 寛

『マックス・ヴェーバー』

今野 元

『5G―次世代移動通信規格の可能性』

森川博之

『紫外線の社会史』

キム・ボムソン

『勤労青年』の教養文化史』

福岡良明

『教育は何を評価してきたのか』

本田由紀

『人生の1冊の絵本』

柳田邦男

『大岡信』折々のうた』

選詩と歌謡』蜂飼 耳

『草原の制覇―大モンゴルまで』

古松崇志

『議会議民主主義の活かし方』

糠塚康江

『有権者って誰?』

藪野祐三

『博士の愛したジミな昆虫』

金子修治ほか

『読解力を身につける』

村上慎一

『きみのまちに未来はあるか?』

除本理史

『新・大学でなにを学ぶか』

上田紀行

『統計学をめぐる散歩道』

石黒貴木夫

『10代から考える生き方選』

竹信三恵子

『でぢやいりました!フツの学校』

『一人で思う、二人で語るみんなで考える』

『イギリスの大学・ニッポンの大学』

刈谷剛彦

『日本の公教育』

中澤 渉

『「文系学部廃止」の衝撃』

吉見俊哉

『優生学と人間社会』

児美川孝一郎

『キャリア教育のウソ』

『この文化部がすごい』

『はすれ物が進化をつくる』

稲垣栄洋

『科学はどこまで進化しているか』

池内 了

『うつくしい若者が「うつくしい」新しい社会』

『わかりあえないことから』

『教育格差』

平田オリザ

松岡亮二

(五年)

出会うGメン (前期)

運動会も終わりの、秋を感じる気候となりました。「○○の秋」と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか? 今回のテーマは「スポーツの秋」です。スポーツを題材に取り上げた本を紹介いたします。



『一瞬の風になれ』 佐藤多佳子

サッカーから陸上部に転部した少年が抜群の才能を持つ親友や仲間とともに支え合いながら青春を駆け抜けるまさに風のような物語です。

『DIVE!!』 森絵都

ミスダイビングクラブ(MDC)に突如現れたコーチ。MDCの存続の危機のために、掲げた目標とは……。わずか一・四秒の空中演技。高さ十メートルの飛び込み台から、時速六十キロのDIVE!



『空をつかむまで』 関口尚

廃校が決まった田舎の中学に通う三人。無理やり入部させられた水泳部で無くなってしまふ中学の名前を残すため、大切な人のため、トリアスロンでの優勝を目指すストーリー。

『243 清陰高校男子バレー部』 壁井ユカコ

東京の強豪中学バレー部でトラブルを起こした灰島公誓は、母の郷里・福井に転居し、幼馴染の黒羽祐仁と再会する。ほとんど活動も行われていないバレー部で一人黙々と練習を始める灰島……。それぞれ欠点を抱えた二人を中心に田舎の弱小バレー部の戦いが始まる!!。(二年)

第1回 Reading Race 開催

今年度、前期生初の取り組みとして、Reading Raceを開催します。

ルール

- ・クラスごとに読まれた本の冊数を競う(図書館で借りられた本に限る)
- ・対象は前期12クラス
- ・1人当たりの貸出冊数で順位を決定

期間

- ・10月1日(木)～
- ・11月6日(金)



中間発表は10月19日あたりに図書館に掲示プラス図書委員を通じて呼びかけます
最終発表で1位のクラスには前期図書委員会より賞状を授与します。

コロナ禍にあって、図書館オリエンテーションなど縮小された行事もあり、まだまだ図書館の魅力を伝えられていないように感じ、この行事を企画しました。
前期生の皆さん、クラスで情報を共有して、どんどん図書館を利用してください。

(三年)



新刊紹介

今年も「さくら文庫」コーナーにたくさんの本が寄贈されましたみなさんは「さくら文庫」をご存知ですか?

平成16年7月、本校一期生の奥村さくらさんが二年生のとき、居眠り運転のトラックの犠牲になり亡くなりました以来、さくらさんご両親が「西校の皆さんのために役立てていただきたい」と本を寄贈してくださっています。これらの本を「さくら文庫」として、図書館入って右手奥の郷土資料前に収蔵しています。今回も芥川賞や直木賞受賞作品をはじめバラエティにとんだ話題の本をたくさん寄贈してくださいました。ぜひ、手にとってみてください。

『破局』

遠野 遥

『少年と犬』

馳 星周

『クスリ絵』

丸山修寛

『感染症大全』

堤 寛

『13歳からわかる! 7つの習慣』

シャック・ヒギンズ

『驚は舞い降りた』

ヨシタケシンスケ

『ものは言いよう』

おかべたかし

『くらべる世界』

おかべたかし

『英語で読む外国人がほんとに知りたい日本の文化と歴史』

ロッキー・トーマス

『いたずらのすきなけんちくか』

安藤忠雄

『英国バレーの世界』

山本 康介

『PRIMITIVE TECHNOLOGY』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

『シン・プリント』

山本 康介

編集後記

一度読んだ本でも、しばらくすると内容を思い出せなくなるが増えた。が、逆にずっと忘れられない本もある。思えば、そうした本は必ずしもあらずいやオチが衝撃的というわけではないように思われる。ありふれた優しい物語こそ、いつまでも心に根付いて離れない。

一年生のときに読んだ中脇初枝の短編集、「きみはいい子」。ひとつづつ温かくて、それでいてどこか悲しい。どこが良いかと聞かれると難しいが、いって言うなら雰囲気だろっか。

同じ理由で宮下奈都の作品も好きだ。独り占めしたくなる物語。彼女が本屋大賞を獲ったとき、嬉しいだけでなく残念に思った。子ども頃の秘密基地が見つかったときのような寂しさ。

夏と比べると秋はいぶん寂しい季節だと思ふ。蝉の声が聞こえない、ふと過ぎてゆく風が肌寒い。とはいえず、最近の図書館はむしろ賑やかだ。運動会が終わって、学習目的の六年生が増えた。今まではあまり見なかった面々に新鮮さを感じつつ、もうそんな時期かと焦りも感じる。

(委員長)

